

4月のある土曜日、がんサロン仲間Hさんが逝った。69歳の若さだった。本当に急な出来事だった。その週の火曜日、がんサロンを開催していたが、入院中の彼は車いすでMSWの担当者に連れられての参加だった。緊急で入院したのとことだった。

1月末、東京で開催されたFJCP

## がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ、同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン 総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

# 病院からあふれた高齢者の行き場は

に彼と一緒に参加した。帰ってからも彼は出雲に2度も出かけていった。相当つらかったのが感じられた。でも彼は果敢に行動した。私は出雲行きを1度は見送った。私もしんどかったからだ。最後にサロンに参加した彼は何時になく雄弁で、死後の段取りをみんなに聞かせてくれた。葬式のやり方、財産分与、山の処分、相続の件など私たちに聞かせるような口調だった。あまりの詳細さに「そんな準備はそこまでいいよ」といったくらいだった。その4日後のお別れだった。

「彼は何か悟っているな」。それが後から感じたことだった。最近「最後の医療」について、いろいろな新聞紙上にぎわせている。逝く人、見送る人、それぞれがもっと自分のこととして真剣に考えるときに来ている。

国は在宅に舵を切ったが自分たちの住む地域はその準備が出来ていない所が多い。私の住む5万人の街、益田市は現在2病院はなんとか回転しているが今後は

わからない。がん患者が増加し、認知症患者が益々増えている昨今、何時入院できなくなるかはわからない。

では入院できなくなったら何処で過ごしたらいいのだろうか。病院も施設も満床ならば自宅で暮らすしかない。その自宅での生活が出来ないのだ。在宅医療体制が整っていないからだ。その上、看取りをしない施設、看取りが出来ない在宅、最悪な現象が出来つつある。行政の担当者はこれで十分と言っているがそうだろうか。高齢化率は今が最高値で今後は入院者は減少になると思っているらしい。しかし都会であふれた高齢者を地方に移動させようとしている国の施策。行きたくない地方にまで高齢者が流れてくる気がする。だとすれば地元の高齢者も都会から移動してきた高齢者も双方が病院からあふれてくること必定だ。新たな施策を実行しなければ死ぬに死ねない現場が出てくるだろう。自分のこととして市民みんなが真剣に考えるべきときだ。